

国立国会図書館



平成27年度東日本大震災アーカイブ国際シンポジウム
地域の記録としての震災アーカイブ ～未来へ伝えるために～
手稿譜コレクション公開に寄せて —— 林光レクチャーコンサート
情報スペシャリストを目指して ワシントン大学情報学大学院における司書教育

2016.6
No. 662

国立国会図書館利用案内

東京本館

所在地 〒100-8924 東京都千代田区永田町1-10-1
電話番号 03(3581)2331
利用案内 03(3506)3300(音声サービス)
ホームページ <http://www.ndl.go.jp/>
利用できる人 満18歳以上の方
ただし、満18歳未満の方には、個別に相談に応じています。詳しくはホームページをご覧ください。
資料の利用 館内利用のみ。館外への帯出はできません。
休館日 日曜日、国民の祝日・休日、年末年始、資料整理休館日(第3水曜日)
おもな資料 和洋の図書、和雑誌、洋雑誌(年刊誌、モノグラフシリーズの一部)、和洋の新聞、各専門室資料

サービス時間

開館時間	月～金曜日 9:30～19:00 土曜日 9:30～17:00 ※ただし、音楽・映像資料室、憲政資料室、古典籍資料室の開室時間は17:00までです。	即日複写受付	月～金曜日 10:00～18:00 土曜日 10:00～16:00
資料請求受付★	月～金曜日 9:30～18:00 土曜日 9:30～16:00 ※ただし、音楽・映像資料室、憲政資料室、古典籍資料室の資料請求時間は16:00までです。	後日郵送複写受付★	月～金曜日 10:00～18:30 土曜日 10:00～16:30

★登録利用者限定のサービスです。

■見学のお申込み/国立国会図書館 利用者サービス部 サービス運営課 03(3581)2331 内線25211

関西館

所在地 〒619-0287 京都府相楽郡精華町精華台8-1-3
電話番号 0774(98)1200(音声サービス)
ホームページ <http://www.ndl.go.jp/>
利用できる人 満18歳以上の方
ただし、満18歳未満の方には、個別に相談に応じています。詳しくはホームページをご覧ください。
資料の利用 館内利用のみ。館外への帯出はできません。
休館日 日曜日、国民の祝日・休日、年末年始、資料整理休館日(第3水曜日)
おもな資料 和図書・和雑誌・新聞の一部、洋雑誌、アジア言語資料・アジア関係資料(図書、雑誌、新聞)、科学技術関係資料、文部科学省科学研究費補助金研究成果報告書、博士論文

サービス時間

開館時間	月～土曜日 10:00～18:00	即日複写受付	月～土曜日 10:00～17:00
資料請求受付★	月～土曜日 10:00～17:15	後日郵送複写受付★	月～土曜日 10:00～17:45
セルフ複写受付	月～土曜日 10:00～17:30	★登録利用者限定のサービスです。	

■見学のお申込み/国立国会図書館 関西館 総務課 0774(98)1224 [直通]

国際子ども図書館

所在地 〒110-0007 東京都台東区上野公園12-49
電話番号 03(3827)2053
利用案内 03(3827)2069(音声サービス)
ホームページ <http://www.kodomo.go.jp/>
利用できる人 どなたでも利用できます。
資料の利用 館内利用のみ。館外への帯出はできません。
休館日 月曜日、国民の祝日・休日(5月5日こどもの日は開館)、年末年始、資料整理休館日(第3水曜日)
※児童書研究資料室は、システムメンテナンス等のため臨時休室することがあります。
おもな資料 国内外の児童図書・児童雑誌、児童書関連資料

サービス時間

開館時間	火～日曜日 9:30～17:00			
児童書研究資料室の資料請求受付	火～日曜日 9:30～16:30			
複写サービス時間	即日複写受付	火～日曜日 10:00～16:00	後日郵送複写受付	火～日曜日 10:00～16:30
	複写製品引渡し	火～日曜日 10:30～12:00	13:00～16:30	

■見学のお申込み/国立国会図書館 国際子ども図書館 03(3827)2053 [代表]

C O N T E N T S

- 02 就任のごあいさつ 国立国会図書館長 羽入佐和子
- 04 迷信から科学へ 明治元年刊行の科学啓蒙書『天変地異』
今月の一冊 国立国会図書館の蔵書から
- 06 平成27年度東日本大震災アーカイブ国際シンポジウム
地域の記録としての震災アーカイブ ～未来へ伝えるために～
- 12 手稿譜コレクション公開に寄せて ——林光レクチャーコンサート
- 15 情報スペシャリストを目指して
ワシントン大学情報学大学院における司書教育
- 23 国立国会図書館の平成28年度予算

24 館内スコープ

箔押しのお仕事

25 本屋にない本

○『博報堂120年史 = Hakuodo 120』

26 TOPIC

○電子展示会「写真の中の明治・大正」に東北の写真を追加しました！

○国立国会図書館の資料利用制限措置について

30 NDL NEWS

○平成27年度納本制度審議会オンライン資料の補償に関する小委員会（第1回）および第27回納本制度審議会

31 お知らせ

○近代デジタルライブラリーを終了し、国立国会図書館デジタルコレクションに統合しました

○新刊案内 国立国会図書館の編集・刊行物

就任のごあいさつ



第16代 国立国会図書館長

羽入 佐和子

この4月に、国立国会図書館長に就任いたしました。

これまで皆様からいただきました国立国会図書館に対するご支援とご協力に心から感謝申し上げます。

昭和23年(1948年)に設立された国立国会図書館は2年後に創立70年を迎えます。創設以来15名の歴代館長が築いてこられた貴重な歴史を大切に、国立国会図書館の活動がいつそう充実いたしますよう全職員と共に力を尽くしてまいります。

国会の図書館であり日本で唯一の国立図書館である国立国会図書館の理念と目的について法律では次のように記されています。

[国立国会図書館法]

[前文]

国立国会図書館は、真理がわれらを自由にするという確信に立って、憲法の誓約する日本の民主化と世界平和とに寄与することを使命として、ここに設立される。

[第二条]

国立国会図書館は、図書及びその他の図書館資料を蒐集し、国会議員の職務の遂行に資するとともに、行政及び司法の各部門に対し、更に日本国民に対し、この法律に規定する図書館奉仕を提供することを目的とする。

国会の一組織として、国立国会図書館はその法律に基づいて、国民を代表する国会の審議に資するために、確かな資料に依拠した客観的な情報を提供することを最も重要な任務としています。この機能を十全に果たしうるためには、法に即して資料を収集し、確実に保存し続けることが大前提です。また、急速に進展しつつある情報のデジタル化を視野に入れ、将来を見通した図書館資料の収集・保存・提供の方法について検討し、有効な手法を取り入れることも必要です。そしていずれの場合にも常に将来を見通す長期的な視点が重要であると考えます。

本年は国立国会図書館5か年計画の最終年度に当たります。この計画は、中期ビジョン「私たちの使命・目標 2012-2016」として2012年に定めたものであり、これまでの成果を取りまとめ、検証し、次期中期計画を定めることが当面の課題です。

中期計画を作成する際にも、国立国会図書館の役割をよく見定め長期的視点に立った計画にしてまいりたいと思います。

図書館は、「時間と空間を超えて知が交流する場」といえます。

私たちは、歴史が紡いできた多くの図書資料に、今、触れることができますが、それらの資料は時

間も空間も超えて存在し続けてきたものです。それらを介して、あるいはそれを核として知的な交流が生まれ、この交流を通して、私たちは過去を知り、現在を理解し、未来を築くべく意欲することが可能になるように思います。そしてそのような仕方で図書館は知識基盤社会の発展に寄与していると考えています。

とくに国立国会図書館は、国の将来を議論する場に直接資料を提供するという極めて重大な役割を担っています。同時に、資料を広く社会に提供し、日本の知識基盤の構築に資することが私たちの使命です。

国会の図書館、唯一の国立の図書館としてこれらの役割を果たすべく、全ての職員とともに全力を挙げて取り組んでまいります。

これまでのご理解とご協力に重ねて感謝申し上げますとともに、引き続きのご支援をお願い申し上げます。

迷信から科学へ 明治元年刊行の科学啓蒙書『天変地異』

永村 恭代

『天変地異』

小幡篤次郎 訳 慶應義塾
明治1 (27丁 18cm 和装)
国立国会図書館デジタルコレクション
で閲覧できます。(モノクロ)
<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/902011>

1 本文8章のタイトルは「雷避(かみなりよけ)の柱の事」「地震の事」「彗星(ほうきぼし)の事」「虹霓(にじ)の事」「九日(ここのつ)の事」同時に出来る事」「三月(みづのつき)並び照す事」「流星(りゅうせい)並に火の玉の事」「陰火(いんか)の事」。

2 二十六夜待ち。月光の中に弥陀・観音・勢至の三尊が現れると言いつた。

3 「貴族院勅撰議員の任命 福澤氏と小幡氏」『読売新聞』1890年10月1日

4 福澤諭吉・小幡篤次郎『學問のすゝめ』[初版再刊][1872] <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1084629>

5 福澤諭吉『訓蒙窮理図解』2版 慶應義塾 明治4 <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/830074>

6 日本科学史学会編『日本科学技術史大系. 第8巻(教育 第1)』第一法規出版 1964 <請求記号 402.1-N685-N>

7 [文部省]『小学教則』出雲寺万治郎刊 明治6 <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/904334>

○参考文献

『小幡篤次郎先生小伝並小幡記念図書館沿革概要』小幡記念図書館 大正15 <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/920549>

『慶應義塾五十年史』慶應義塾 明治40 <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/812742>

『天変地異』。少々恐ろしげな書名だが、江戸時代まで迷信とともに語られていた雷や地震といった自然現象を科学的に解説した読み物である。

明治維新後、日本の近代化を目指し、欧米の自然科学書を翻訳または抄訳編集した科学啓蒙書が多数出版された。『天変地異』も欧米の複数の自然科学書を抄訳編集し、雷、地震、彗星、虹、日暈、月暈、流星、陰火を全8章で解説した科学啓蒙書である¹。図と欧米の事例を取り入れ、子どもや初心者向けに解説している。

まず、雷は悪しき神の叫びではなく電気であり、落雷対策には雷避の柱(避雷針)が有効である。地震は(現在のプレート理論とは異なるが)地上真下の岩と地底の火との隙間で発生した水蒸気が出口を求めて起きる。彗星は、大昔は禍災や疫病の前兆と恐れられたが、太陽の周りを回る星のひとつである(写真2)。虹は、昔の中国では気が乱れる兆候と言われたが、にわか雨の無数の水滴がプリズムの役割をして、光が屈折と反射をして目に入り七色に見える(写真3)。日暈は、昔の中国で弓の名人が九つ同時に輝いた太陽を射落とした話があるが、実際は上空の水滴が氷となり、光がその氷を通り抜け、氷の様子により光の輪がひとつもしくは何重にも現れる。月暈(写真4)は日暈と同じ原理で、七月二十六日の夜に三つの月が同時に昇ると言われ月待ちをする習慣²は、この日の夜に月暈を見た事で習慣になったのだろう。流星は、極めて小さい星が、地球の大気との摩擦で光を放つ。陰火とは、狐火や人魂を指すが、これはリン化水素の発火であるとされている。

著者の小幡篤次郎(1842-1905)は、豊前国中津藩(現在の大分県)に生まれ、同郷の福澤諭吉(1835-1901)を補佐して慶應義塾の発展に尽力した人物として知られている。福澤との関係について、『読売新聞』³に「福澤諭吉氏と小幡篤次郎氏との間柄は管鮑も啻ならざる交情にして共に與に後世の景仰する所なる」とある。また、『學問のすゝめ』の初版⁴は、2人の名前で「同著」となっている。『天変地異』は、福澤の科学啓蒙書『訓蒙窮理図解』⁵と同年に出版された。窮理(学)とは西洋流学問一般のことで、特に現在の物理学を指す。『訓蒙窮理図解』は、熱、空気、水、風・雲・雨などの気象現象、引力、昼夜、四季、日食月食を説明するが、地震、雷、虹、彗星については、「我社中小幡氏が著述に天変地異といふ書ありてこれに委しければ慥とこゝに畧したるなり」としている。一方、小幡の『天変地異』には、地球の公転について「同社の著述せる訓蒙窮理図解に詳かなれば爰に贅言せず」とある。

この2冊は、明治5-6年(1872-1873)に絶頂を迎える「窮理熱」と呼ばれる科学啓蒙書ブームの口火となった⁶。また、2冊とも、文部省「小学教則」(明治5年制定)⁷で下等小学の教科書とされた。

ちなみに『天変地異』という書名は、「天変地異の解」とするところを詞長く句調が悪いので「解」の一字を略したと、序文にある。天で起こる変動も地で起こる異変も近代科学で解き明かそうとする本書からは、日本の近代化への熱意が伝わる。

(ながむら やすよ)

調査及び立法考査局国会レファレンス課)



写真1 表紙裏に、雷と避雷針が描かれている。

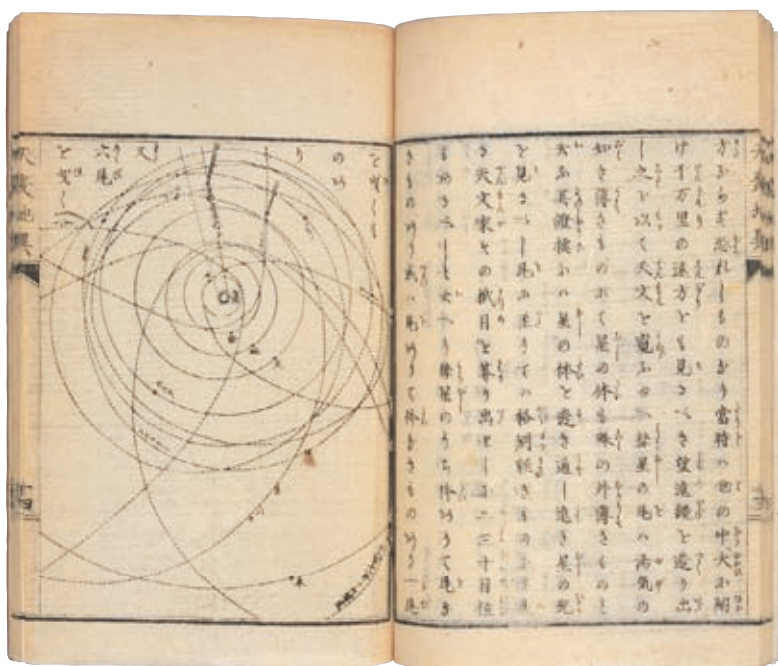


写真2 「彗星(ほうきぼし)の事」

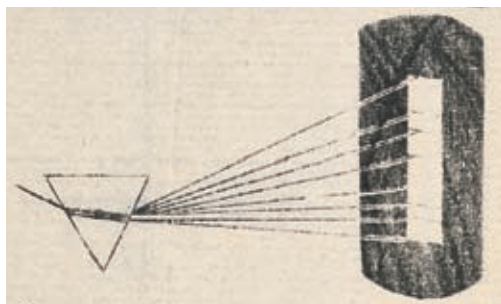


写真3 「虹霓(にじ)の事」



写真4 「三月(みづのつき)並び照事」

小幡 篤次郎

おばたとくじろう 1842-1905



豊前國中津藩で藩士の子として生まれる。藩校進脩館で教育に従事していたところ、1864年福澤諭吉に連れられ江戸に赴き、福澤の門に入り英書を学び塾頭となる。幕府開成所助教授、中津市学校初代校長、東京師範学校中学師範学科教授監督、欧米巡遊、東京学士会院会員、交詢社幹事、『時事新報』創刊時の尽力を経て、慶應義塾の塾長、副社頭に就き、福澤没後は社頭を継ぐ。また、貴族院議員(在任1890-1905)を務める。遺囑によって建てられた中津図書館の流れを汲む中津市立小幡記念図書館がある。

写真出典: 「小幡先生」『東京景色写真版』江木商店 [明治26?] <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/764109/107>

平成27年度東日本大震災アーカイブ国際シンポジウム

地域の記録としての震災アーカイブ ～未来へ伝えるために～



国立国会図書館と東北大学災害科学国際研究所は、平成28年1月11日に、仙台市の東北大学災害科学国際研究所において、平成27年度東日本大震災アーカイブ国際シンポジウムを開催しました。

当館と同研究所は、平成25年4月に東日本大震災に関する記録・教訓等の収集・保存・調査研究・公開に関する包括的な相互協力協定を締結しています。平成26年、平成27年に続き、同協定に基づき共催する3回目となる今回は、全国から180名近くの方が参加し、「地域の記録としての震災アーカイブ～未来へ伝えるために～」をテーマに、被災地域において、災害記録をデジタルアーカイブとして保存し公開する意義について意見を交わしました。本稿では、シンポジウムで行われた特別講演、報告、パネルディスカッションの概略をご紹介します。

*シンポジウムの動画やプレゼンテーション資料は国立国会図書館東日本大震災アーカイブ「ひなぎく」(<http://kn.ndl.go.jp/information/424>)でご覧になれます。

特別講演

アチェ津波博物館館長 トミー・ムリア・ハサン氏

「博物館における教育・研究活動と災害アーカイブの統合 —アチェ津波博物館におけるアチェ津波デジタルアーカイブ (DATA) —」

アチェ津波博物館は、2004年のスマトラ島沖地震による津波の被害を語り継ぐために、インドネシアのスマトラ島北部、アチェ州に2011年に開館したメモリアル施設です。巨大地震と大津波が人の多く住む地域で発生し、甚大な被害をもたらしたという点は、東日本大震災と共通しています。シンポジウムの前半では、同館館長のトミー・ムリア・ハサン氏が、死者・行方不明者が約22万人にのぼった津波被害や復興の概況とあわせて、アチェ津波博物館の機能、博物館を支えるネットワーク、計画中のアチェ津波デジタルアーカイブ等を次のように紹介しました。

アチェ津波博物館は、災害情報・防災教育の拠点であると同時に、来館者がアチェの歴史や文化を知る場であり、避難ビルとしての役割も果たしています。訪問者数は開館以来増加を続け、2015年には前年比18.2%増の56万人余りが訪れました。

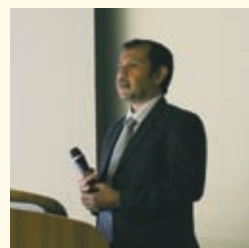
インドネシア国立公文書館やシアクアラ大学（アチェ州最大の国立大学）等の大学・研究機関との協力は、当館が活動していくうえで欠かせません。協力関係をさらに強化して、大学等で行われる専門的な研究を一般の人々に伝え広げていきたいと考えています。

陸地に打ち上げられた発電船など、周辺に点在する津波遺構も当館が管理しています。これら遺構の保存は、災害の記憶を留めるために重要ですが、莫大な費用がかかりますし、年々傷んでいきます。一方、デジタルアーカイブには、遺構などモノのアーカイブと比較すれば、傷みにくく、安価に、広く利用に供することができるという利点があります。アチェには津波の被害や、復興に関する多くの資料がありますが、十分に共有できていません。

これらの多くの資料を全世界の人々と共有するために、アチェ津波デジタルアーカイブ（DATA）プロジェクト*が2015年12月に発足しました。DATAプロジェクトは、アチェの沿岸地域の復旧・復興に関するすべての活動をオンラインデータベース化することにより、2004年のアチェ津波の教訓を広く共有することを目的としています。関係機関が協働し、膨大な紙の資料のデジタル化を行いつつすでにある様々なデジタル資料や日々生まれる新たな資料を集約するデジタルアーカイブを構築することを目指しています。そして、博物館は、このようなデジタルアーカイブを紹介する場としても最適な場であると考えています。



アチェ津波博物館館長
トミー・ムリア・ハサン氏



アチェ津波デジタルアーカイブ（DATA）プロジェクトについては、シアクアラ大学のムザイリン・アフアン氏より補足説明が行われました。



アチェ津波博物館（10ページ参照）

* DATAプロジェクトは、アチェ州政府、シアクアラ大学、東北大学災害科学国際研究所等の大学・研究機関が協力して進めている。2016年12月に、アチェ津波デジタルアーカイブの一般公開を予定している。

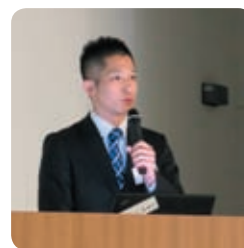
事例報告

続いて、日本国内で震災関連のアーカイブを運営する自治体の担当者から事例報告を行い、それぞれのアーカイブの概要と、直面している課題を報告しました。今後の資料収集や利活用推進といった共通の課題も浮き彫りになりました。

八戸市（漆戸啓二氏 防災危機管理課主事）

「青森震災アーカイブについて」（<http://archive.city.hachinohe.aomori.jp/>）

「青森震災アーカイブ」は、青森県の被災4市町（八戸市、三沢市、おいらせ町および階上町）の共同事業として構築



され、平成26年4月に公開されました。行政文書や写真・動画等を収録しています。報告では、貴重なデータの例として、八戸工業大学の学生が、自治体職員、民間企業社長、町内会長らにインタビューした体験談の文書記録が紹介されました。

「青森震災アーカイブ」の課題として、公開する公文書の範囲やマスキング対象の絞り込み、運用開始後の新規登録データ数の伸び悩み等が挙げられました。また、震災アーカイブは、たとえアクセスが少なかったとしても、必要とされるときに備えて資料を活用できるようにしておくことが大事ではないかとの見解も示されました。

宮城県図書館（菊地正氏 副館長）

「東日本大震災アーカイブ宮城について」(<https://kioku.library.pref.miyagi.jp/>)

宮城県と県内全市町村が連携して構築された「東日本大震災アーカイブ宮城」は、平成27年6月に公開されました。行政資料のほか、写真、動画等が収録されています。宮城県内全域のアーカイブであることから、県内市町村の震災対応を横断的に知ることができることや、利用規約に同意することを条件に、利用者がすぐに収録資料を二次利用できるように工夫されている点等が特徴です。

今後の課題として挙げられたのは、利活用の推進です。そのためには、メタデータの精度を上げて的確に検索できるようにすることや、テーマ別に収録資料の例をパッケージにして紹介することなどが考えられます。特に後者について、平成28年度は、宮城県内の高等学校と連携して防災教育の現場でそ

うした取り組みを行っていくという方針が示されました。

浦安市立中央図書館（白沢靖知氏 奉仕第2係係長）

「浦安震災アーカイブについて」(<http://urayasu-shinsai-archive.city.urayasu.lg.jp/>)

「浦安震災アーカイブ」は、市域の86%が液状化被害を受けた千葉県浦安市によるアーカイブです。浦安市の行政文書・写真・動画のほか、民間の研究機関や大学などが作成した学術資料や調査記録を収録しており、平成27年7月に公開されました。

引き続き震災関連資料の収集を進め、永続的にアーカイブ化する体制をつくっていくことや、アーカイブを活用した防災教育、環境教育の取り組み等が課題として挙げられました。



進捗報告

次に、進捗報告を行いました。最初に、岩手県において進められている震災関連アーカイブの検討状況について、東北大学災害科学国際研究所の柴山明寛准教授が、「震災津波関連資料の収集・活用等に係るガイドライン（案）」を中心に紹介しました。続いて、国立国会図書館から、国立国会図書館東日本大震災アーカイブ（ひなぎく）について、諏訪康子電子情報部主任司書が、東北大学災害科学国際研究所から、同研究所の震災アーカイブである「みちのく震録伝」について佐藤翔輔助教が、それぞれ最近の動きを中心に報告しました。

パネルディスカッション

「地域の記録としての震災アーカイブ～未来へ伝えるために～」

柴山准教授の進行のもと、事例報告者および進捗報告者をパネリストとして、地域の記録としての震災アーカイブを発展させていくために必要なことというテーマでパネルディスカッションを行いました。

自治体の震災アーカイブの担当者からは、担当するアーカイブが「地域の記録」として価値を高めるために必要なこととして、次のような見解が示されました。

- ・自治体の資料だけでなく、企業の復興事業の記録を集めるなど収集範囲を広げ、地域全体で長期的にアーカイブを育てていきたい（八戸市 漆戸氏）。
- ・アーカイブが単なる記録ではなく、ビッグデータとして解析されて活用されることを期待したい（宮城県図書館 菊地氏）。
- ・素材として資料を収集するだけでなく、それらを料理して防災教育のためのプログラムを作成し、利活用を推進していきたい（浦安市立中央図書館 白沢氏）。

佐藤助教は、地域で利用されるアーカイブとなるために、地域でどのような情報が求められているかという情報要求を明らかにする必要があると述べました。その方法としては、例えば、被災する前にどのような情報があったらよかったかということや被災者から聞き取ることを挙げました。

一般参加者からの質問にパネリストが回答した後に、シンポジウムに参加していた有識者が意見を述べる時間が設けられました。最後にその一部をご紹介します。

・震災アーカイブを使う側がアーカイブづくりに参加する場が作られることが重要である。地域と密着した場でつながっていくことによって、アーカイブの新しい使われ方が提案されることに期待をしている。コミュニティの記憶を作り、それを将来へ伝えるために震災アーカイブが活用されることが望まれる。震災アーカイブを使ってネットワークができ、震災で傷ついたコミュニティが再生されれば、100年後にもつながっていく。（杉本重雄筑波大学図書館情報メディア系教授）

・広島市の平和学習の教材を学び手の高校生自身が作成したら非常にうまくいった。震災の記憶を伝えるための教材開発は、教材の使い手が何を学びたいと思っているかということ吸い上げて行うことが望ましい。（渡邊英徳首都大学東京システムデザイン学部准教授）

・震災アーカイブに収録されている資料は多種多様で、全体が見通せない。全体の見取図が必要ではないか。アーカイブ構築の歴史を記録していくことも求められる。（牧原出東京大学先端科学技術研究センター教授）

（電子情報部電子情報流通課）



アチェ津波博物館訪問記

平成28年2月20日から25日にかけて、アチェ津波デジタルアーカイブ（DATA）プロジェクトの動向を調査するため、このプロジェクトのリーダーの1人である東北大学災害科学国際研究所のセバスチャン・ボレー助教の協力を得て、ボレー助教とともにインドネシアのアチェ州の州都バンダアチェを訪問しました。

アチェ津波博物館やシアクアラ大学では、関係機関と協力し、アチェ津波デジタルアーカイブを構築する準備を進めています。大規模な震災・津波被害の記録を継承する取り組みとして、当館の東日本大震災アーカイブプロジェクトと共通する部分も多く、今後ともお互いの経験を共有していくこととしました。本稿では、シンポジウムの特別講演でも紹介したアチェ津波博物館を訪問した際の様子を報告します。

2月21日の日曜日に訪れたアチェ津波博物館は、多くの来館者で混み合っていました。入口から両脇を高い壁に挟まれた暗い道を進むと、水しぶきがかかります。壁を水が流れているためで、高い壁は津波の高さを表しているそうです。続いて、被害の状況の画像が映し出されるモニターが多数置かれた薄暗い空間に出ます（写真①）。津波に巻き込まれたあとに行きつく海の底を想起させるつくりになっているそうです。さらに進むと、高さが30メートルもある円筒形の空間があります。「祈りの部屋」と呼ばれる場所で、犠牲者の名前が壁面に刻まれています（写真②）。名前を刻む作業は、現在も続けられているそうです。

祈りの部屋を出ると、明るく広々とした空間につながり、「希望の橋」を渡って展示スペースに進んでいきます。橋を渡る人の頭上には、支援した54

か国の国旗と各国の言葉で書かれた「平和」の文字が並ぶプレートが掲げられています（写真③）。

津波が襲来した当時、アチェは非常事態宣言下の紛争地域で、インドネシアからの分離独立を目指す「独立アチェ運動（GAM）」と治安部隊の間で衝突が続いていました。インドネシア政府は、外国人の立ち入りを厳しく制限していましたが、津波を契機に世界からの支援を受け入れ、和平合意が結ばれました。博物館のこうした展示から、被災後にもたらされた平和を大切にするアチェの人々の気持ちが伝わってきます。

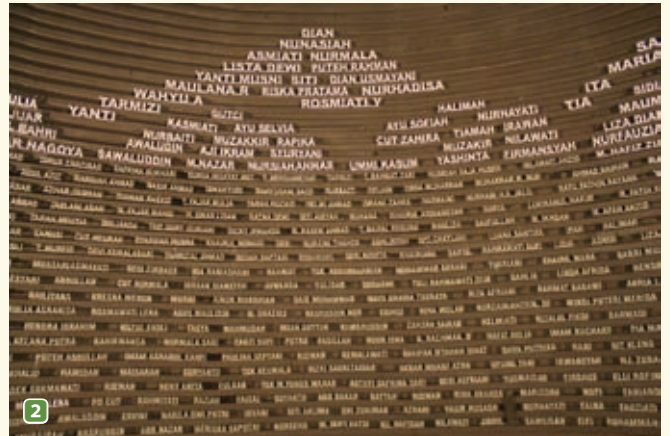
展示スペースには、津波の被害や復興の状況を示す写真や展示物、地震や津波のメカニズムを学ぶことのできる展示物等があり（写真④～⑥）、訪問者が津波やアチェについて深く学ぶことのできる空間になっています。

また、アチェに点在する津波遺構も訪れました。海岸から約3キロメートルのところ打ち上げられた発電船（写真⑦）は、周辺も整備され船の内部では被害の状況などが展示されています。学校の先生に引率された子どもたちや観光客でにぎわっていました。多くの人がメモリアル施設を訪れ、被災経験を学ぼうとしていることが強く印象に残りました。

（電子情報部電子情報流通課 河内明子）



津波博物館入り口付近（案内役のNazir氏と）



- 1 「記憶の空間」。海の底を想起させる空間に、津波の写真等を映し出すモニターが並んでいる。
- 2 「祈りの部屋」に刻まれた被害者の名前（東北大学災害科学国際研究所セバスチャン・ボレー助教提供）
- 3 「希望の橋」の頭上に掲げられた支援国のプレート
- 4 津波前のバンダアチェの模型
- 5 津波後のバンダアチェの模型
- 6 被災したコーラン
- 7 発電船

イベントのお知らせ

東日本大震災に関する書類・写真の整理・保存講習会 ～震災の記録・証言を将来に活かすために～

東日本大震災に関するアーカイブ活動支援の一環として、アーカイブの専門家による講習会を福島市で開催します。

○開催概要

6月27日(月)13:30～16:50(13:00開場)
 コラッセふくしま 5F 小研修室
 (JR福島駅から徒歩3分)
 定員50名(先着順)

○講義

川副 早央里氏(早稲田大学文学学術院文化構想学部現代人間論系助手)
 「災害体験の記憶を記録に遺すーいわき明星大学震災アーカイブ室における証言記録の収集と保存の取組ー」

○講義・ワークショップ

田中 洋史氏(長岡市立中央図書館文書資料室室長)
 「長岡市災害復興文庫の構築と発信ー中越大地震から東日本大震災へー」
 「東日本大震災避難所資料の整理と活用」

イベントの詳細、申込み方法は、国立国会図書館東日本大震災アーカイブ(ひなぎく)のお知らせをご覧ください。

<http://kn.ndl.go.jp/information/467>

手稿譜コレクション 公開に寄せて

——林光レクチャーコンサート



国立国会図書館は、平成28年3月1日から手稿譜のコレクションとして作曲家林光氏（1931-2012）旧蔵資料約600点の提供を開始し、3月16日には、提供開始を記念したイベントを東京本館（新館3階大会議室）で開催しました。

イベントでは、石渡裕子国立国会図書館利用者サービス部長による開会挨拶のあと、前半に外部講演者による講演と当館からの報告、後半に林光作品の演奏を行いました。

* 当日のプログラムおよび講演資料は、当館ホームページに掲載しています。<http://www.ndl.go.jp/jp/event/events/20160316concert.html>

音楽資料と手稿譜コレクション

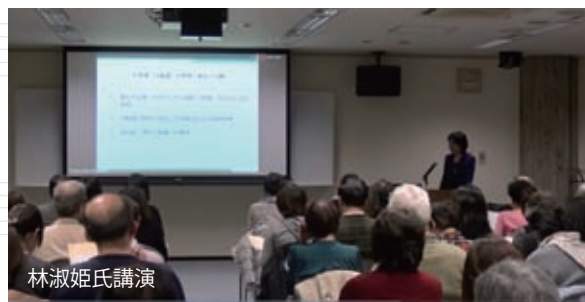
林淑姫氏（旧日本近代音楽館事務局長・主任司書）から「音楽資料と手稿譜コレクション～手稿譜（自筆譜）収集の意義」と題して講演がありました。

手稿譜とは、作曲家本人の手による自筆譜等の手書きの楽譜のことです。音楽作品の発表は、文学作品などと異なり、出版ではなく演奏を主体とするものであり、印刷された出版譜が出来るのは作品製作

の最終工程です。このため、音楽作品の中には、手稿譜しか存在せず、未出版の作品も数多く存在します。従って、手稿譜は作曲家の作品研究を行う上で重要であり、加えて、作品を再演する上でも必要な貴重な資料である、という説明がありました。

これまで日本での手稿譜収集は、日本近代音楽館を始めとする民間の機関を中心に進められてきました。当館における収集活動は、作品の散逸を防ぐだけでなく、手稿譜を必要とする人々に広く提供することで、文化財としての手稿譜を次世代へ繋いでいく活動となる、という期待が語られました。

終わりに手稿譜収集の今後のあり方として、収集の継続と推進の重要性、収集機関間のネットワークおよび日本の資料に適した目録法の確立の必要



林淑姫氏講演

○手稿譜及びその関連資料の提供について

当館では、新たに日本人作曲家の手稿譜及びその関連資料（歌詞原稿、台本等、作曲活動に関連する資料）の収集を開始しました。最初のコレクションとして、林光氏旧蔵資料のうち平成27年11月までに受入れ・整理を終えた約400作品を提供しています。

当該コレクションは複数回にわたる分割受入れを想定しており、今後も受入れ・整理を行い、提供していく予定です。

閲覧は許可制です。調査・研究を目的とする場合に限り利用できます。加えて、手稿譜の閲覧には、事前予約が必要です。資料の検索は、リサーチ・ナビ上で公開しているPDFファイルのリストを用いて行います*。

また、デジタル化した手稿譜11作品（18点）を当館デジタルコレクションで公開しています（館内限定公開）。なお、デジタル化作業が済んでいる作品は、デジタル化資料を閲覧していただけます。（デジタル化資料の閲覧には、許可は不要です。）デジタル化資料からのプリントアウトは提供していません。

*リサーチ・ナビトップ>音楽・映像資料をさがす>手稿譜及びその関連資料
<http://navi.ndl.go.jp/avmaterial/entry/manuscript.php>



性等が指摘されました。

手稿譜及びその関連資料の提供について

当館からは、東京本館新館1階音楽・映像資料室で提供を開始した手稿譜について、収集の経緯、利用方法および林光コレクションの概要を報告しました。

林光作品の演奏

林光作品に造詣が深い池田逸子氏（音楽評論家）の構成・解説により、林光作品の演奏が行われました。最初に林光の人と音楽についての概説があった後、演奏に沿って曲の紹介がありました。

演奏されたのは、総数2千点を超えると推定される作品の中から、会場に合わせて選択された12曲です。歌のほか、チェロやギター、フルートの演奏もあり、林光作品の世界と作曲に対する姿勢を知る上で貴重な機会となりました。

コンサートの曲目、出演者

- 十二月（つき）の歌 ～「森は生きている」より
- 真田隊マーチ ～「真田風雲録」より
オペラシアターこんにやく座メンバー
- 舟唄 ～「皇帝ジョウンズ」より
新井純（歌）、佐藤紀雄（ギター）
- いってしまったあんな… ～「トラストDE」より
- クレーンマンの歌 ～「比置野ジャンバラヤ」より
新井純（歌）、木ノ脇道元（フルート）、佐藤紀雄（ギター）
- 「裸の島」の主題によるパラフレーズ 多井智紀（チェロ）
- メメント 木ノ脇道元（フルート）、佐藤紀雄（ギター）
- ミラボー橋 ～「パリ1923」より
吉川真澄（歌）、木ノ脇道元（フルート）、佐藤紀雄（ギター）
- 子供と線路 吉川真澄（歌）、木ノ脇道元（フルート）
- 細柳中学校校歌 ～映画「裸の十九才」より
- 石内尋常高等小学校校歌 ～映画「花は散れども」より
- 岩手軽便鉄道の一月
オペラシアターこんにやく座メンバー

※オペラシアターこんにやく座（歌、アコーディオン：梅村博美、青木美佐子、花島春枝、高野うるお、佐藤久司、佐藤敏之、島田大翼）



○林光の人と音楽（池田逸子氏（音楽評論家）解説）

林光さんは、あくまでも今生きている時代、社会とともに歩いて、作曲活動を行った人でした。時代や社会の動きに流されるというのではなく、起きている物事を、常に、慎重に、複眼で、批評的に見つめています。

社会的な問題をそのままテーマや題材にすれば良いというものではない、と林さんはいつも言っていました。童話や民話、わらべ歌や民謡など、さらには神を称えるバッハの音楽にも、社会的なテーマは隠れているのです。

林さんは、自分も含めた人間の悲しみや怒り、喜びや希望を、直截、作品にするのではなく、重たいテーマであればあるほど、それらをいったん対象化し、普遍的なテーマとしてとらえ直して作品化しようとしてきました。

○原爆小景

例えば、「原爆小景」ですが、林さんは1951年に原民喜の詩と出会い、1958年に第1章「水ヲ下サイ」を発表します。そこから次の第2章「日ノ暮レチカク」、第3章「夜」を書くまでには13年の月日が、終章「永遠のみどり」を書くためには、さらに30年もの月日が必要でした。

作品を完成させるために林さんの背中を押したもののひとつとして、1980年から始まった「林光 東混 八月のまつり」があります。これは核の恐怖の無くな



る日まで毎年8月に「原爆小景」を歌おうとい

うコンサートですが、そのような演奏活動、教員やこれからの時代を生きる子どもたちのための活動など、そうした活動の総体が林さんの背中を押し、遺された詩の普遍的なテーマを、納得のいく書き方で作品化したのだと思います。

○作曲への姿勢

林さんは、重厚すぎない書き方、押しつけがましくない書き方の追及にこだわっていました。聴き手が我を忘れるほど有頂天になって喜んだり、悲しみにうちめめされてしまうことなく、音楽として楽しんでもらいながら物事の真相、普遍的なテーマを聴き取ってもらうということです。押しつけるのではなく、聴き手に提案し、聴き手の批評を求める。そういう作曲の姿勢だといえると思います。

林さん自身も、若い頃から傾倒していた宮澤賢治を例に出して語っていました。「ユーモアやファンタジーに満ちた楽しくおおらかな世界」と「世界がぜんたい幸福にならないうちは、個人の幸福はありえない」とする『農民芸術概論』の「息づまるようなテーゼとを、断ち切ることなく、まるごとのみこみたい」という願いを作品化すること。それが林さんの作曲のスタンスであったと思います。

※当日の解説を元に音楽映像資料課が構成しました。

終わりに

貴重なコレクションをご寄贈くださった林光氏のご遺族に感謝申し上げますとともに、当館で手稿譜とその関連資料を所蔵・提供することにより、長期に

わたって日本の音楽研究に役立つよう、今後も活動に取り組んでいきたいと思ひます。

（利用者サービス部音楽映像資料課）

情報スペシャリストを目指して

— ワシントン大学情報学大学院における司書教育

東川 梓

2013年8月から2015年6月まで、筆者は長期在外研究員としてシアトルのワシントン大学（UW）情報学大学院（Information School、以下 iSchool）に留学する機会を得ました。iSchoolは米国において伝統ある図書館情報学の大学院の一つですが、日本からの留学生はほとんどおらず、あまり知られていません。そこで本稿ではまず、iSchoolの概要と歴史について紹介し、続いて、筆者がこの学校で学んだことについて述べたいと思います。



iSchoolとは

iSchoolは米国図書館協会（ALA）の認定校の1つです。北米で司書になるためには、ALA認定校である図書館情報学の大学院を修了することが求められます。7年ごとに更新されるALAの認定審査基準は厳しく、例えば2013年に南コネチカット州立大学のALA認定校が更新されなかったように、既存の認定校でも認定を外されることがあります。入学した大学がALA認定校であっても、卒業時にALA認定校でなくなると、在校生は司書の資格が取れなくなってしまう。筆者がiSchoolに通っていた時期

にも、このALA認定校の審査が行われていました。ALAの認定が外されるのは大学側にとっても在校生にとっても死活問題になるため、審査官が調査をしていた一週間は学校全体に緊張感が漂っていました。

iSchoolには大きく分けて4つのコースがあります。情報学専攻博士課程（PhD）約50名、図書館情報学修士課程（MLIS）約400名、情報管理学修士課程（MSIM）約200名、情報科学学士課程（Informatics）約250名で、計約900名という大所帯です。UW全体では約7000名の留学生¹がいるのですが、2013年にMLISに入学した学生のうち、留学生は中国人2名、イ

ンド人1名と筆者しかいませんでした。米国の図書館界では白人の女性が多く²、その傾向はMLIS入学者にも当てはまっており、入学者全体の約8割が女性で、米国国籍の約7割が白人でした³。

MLISでは、主に図書館に携わる情報専門家を育てるための教育を行なっています。文系の学士号を取得後、そのままMLISに入学する学生が多いようですが、中には他分野の修士号や博士号を取得後に、主題専門司書になるために必要な司書資格を取得する目的で入学する学生もいます。学校図書館司書を目指す人も多いため、教育学と



1

図書館情報学の修士号を同時に取得する学生もいます。一方、図書館で働くことを夢見てMLISに入学しても、司書の採用状況が悪いことを鑑みて、公共政策学、アーカイブズ学、博物館学などの専攻に切り替える学生もいます。もっともMLISで学ぶ情報学の考え方は他分野への応用が可能のため、図書館以外の就職先を選択する学生が少なくないとも言えます。

近年のiSchoolの卒業生の進路は、約6割が図書館、約3割が教育関係、残りがその他（IT関連、研究職、コンサルティングなど）となっています

（2014年実績⁴）。報告されている数値だけを見ると、卒業生は順調に図書館に就職しているように見えますが、同期の卒業後の実態を見る限り「図書館に就職」には司書補、非常勤職員、研修員なども含まれており、正規の司書として採用される事は大変難しいようです。大学院が主催する在校生向け就職セミナーに卒業生が参加する姿を見かけることも多く、話を聞くところによれば、IT関連の会社でアルバイトをしながら図書館の司書採用面接を受け続けている人もいます。iSchoolのような伝統校を出ても、司

書としての就職は厳しいのが米国の図書館界の現状です。

MLISの授業

MLISには通学課程と通信教育課程の2つのプログラムが併設されています。開講授業は各課程で異なり、相互履修は可能ですが、履修登録の際には所属学生が優先されます。オンラインの授業では教室での発言や発表の代わりに、自分が発表する姿を録画してアップロードしたり、チャットで教授や他の学生と議論したりします。

iSchoolの歴史

米国における図書館学校の歴史は19世紀に始まりました。1887年、米国初の図書館学校がMelvil Dewey氏によってコロンビア大学に誕生しました。それから24年後の1911年にiSchoolはわずか10名の学生でUWの教養学部図書館経済学科として設立されました。

iSchoolは意外なところで日本と深い関わりがあります。1951年に当時のiSchoolの学科長であったRobert Gitler氏が、日本で図書館学校を運営するために慶應義塾大学に派遣されました。日本滞在期間は当初1年の予定でしたが、結局iSchoolを辞めて、5年にわたり、慶應義塾大学の図書館学科主任教授として図書館員養成の指導にあたりました。滞在中は上智大学図書館の設計などに取り組み、日本の図書館の発展に寄与しました。

1980年代から90年代にかけて米国の図書館情報学の大学院は受難の時代に突入し、ALA認定校のうち15校が閉鎖、他の学校も縮小または合併して生き延びました。iSchoolでは1996年からMLISで教えるカリキュラムの見直しを行うことに決め、劇的に新しい情報学大学院に変

化していきます。2003年には当時はまだ珍しかったリサーチ・コモンズも設け、iSchoolが高度な研究に関わるようになっていきます。大学や大学院のランキングを定期的に発表しているUS News and World Reportの2015年版によれば、iSchoolは図書館情報学の大学院において全米3位と評価され、米国の図書館界で活躍する人材を一貫して輩出しています。





1 UWのキャンパスには数種類の桜の木があり、春になるとキャンパス内の様々な場所でお花見を楽しむことができます。2 iSchoolの校舎一階にあるホールは普段は学生の自習スペースとして利用されています。様々なイベントも催されます。3 UWのシンボルの一つであるジョージ・ワシントンの像。

MLISは修了までに63単位が必要です。学期は秋・冬・春・夏の4学期制であり、各学期の中間および期末に試験（主にレポート提出）が行われます。MLISの初年度は、必修科目を中心としたカリキュラムが組まれており、情報学の基礎から図書館経営まで幅広い分野の知識を身につけていきます。一方、2年目からは多くの授業を自由に選択することができるようになります。2年目の後半は修士論文の代わりとなるCapstoneというプロジェクト（後述）に重点的に取り組みます。全体として2、3年間で修了するスケジュールをとっています。

選択科目は自分の希望する進路（司書・アーキビスト・IT技術者など）に合わせた様々な授業の中から選ぶことができるため、筆者は司書業務に関する授業を主に履修していました。筆者が実際に受講した中で、興味深かった授業を簡単に紹介します。

Information Resources, Services, and Collection

情報資源・利用者サービス・蔵書

米国ではレファレンスの質問が電子メールやチャットなどで行われることが多くなっています。この授業では、全員がInternet Public Library (IPL)のウェブサイトのレファレンス回答者として登録して、毎週最低1回は世界各国から届くレファレンスに回答します。一般の方から届く質問に、学生はIPLで決められたルールに沿って

回答します。回答には必ず3通りの情報源と、各情報源にたどり着くまでの探索方法を記載します。回答を送った後、3回目まではIPLのベテランスタッフによるチェックを受け、回答に不足していた箇所、例えば調査不足で見つけられなかった他の情報源などが指摘されます。このように実地でオンライン・レファレンスを体験することによって、レファレンス業務を深く理解することができます。また、実際の回答を受け取った利用者から感謝のメールをもらうこともあり、受け取った学生もやる気を出します。教科書に書かれている問題や教員が作った問題を課題として解くよりも、レファレンスの実態を直に体験することができるメリットもあります。残念ながらIPLは2015年に終了しましたが、約20年間iSchoolを始めとする米国の図書館情報学大学院生のレファレンス修行の場になっていました。

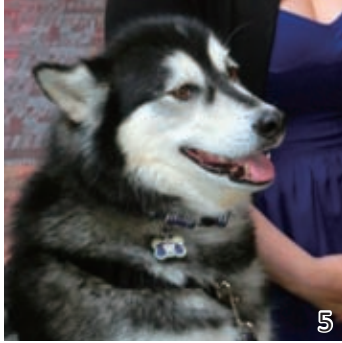
このレファレンスの授業では、IPLでの経験を踏まえて、実際のレファレンスの現場を利用者として何度か体験する課題が与えられます。住まいの近くの図書館に出向き、利用者としてレファレンスの質問をして、その時にどのように司書が対応したかを克明に記録します。筆者は今まで利用者としてレファレンスを体験したことがなかったのですが、実際体験してみると他のサービス業と比べて利用者への対応の悪さが目に付き、自らの仕事ぶりに対

しても猛省する契機となりました。オンラインでも複数の図書館にメールやチャットでレファレンスの質問をして、回答方法を比較する課題もありました。メールで質問した当日に回答が届く図書館から1週間もかかる図書館まであり、回答レベルも様々でした。IPLの経験をした上で実際の司書のオンライン・レファレンス回答を見ると、現場での良い点と悪い点が見えてきて、自らがレファレンス行う場合に見習うべき箇所が明確になりました。

Genealogy Library Services

系図学の利用者サービス

米国では利用者の家系図調査をサポートすることが図書館サービスの一環となっています。家系図を作成するには国勢調査のデータをもとにするのが一般的です。米国では国勢調査の実施72年後には国立公文書館によってデータが公開されます。しかし、このデータの検索項目は住所のみに限定されるため、民間企業やボランティアたちが画像を判読して、氏名・性別・住所・生年月日・死亡年月日からも調べられる有料データベースを作製しています。このうち、アンセストリーという家系図用のデータベースが公立図書館ではよく使われます。公立図書館では地元の歴史協会と協力して、アンセストリーの講習会を開催しています。人名からの検索は難しく、例えば国勢調査の担当官が誤って原本に記載した場合、移民が自分の名前を現地風に変



えて報告している場合、原本を誤って判読してデータ入力した場合など、検索する側が想像を膨らませないと、該当者が検索にヒットしないこともあります。図書館の利用者はこのような検索には慣れないため、司書が検索のコツを案内することが重要になります。シアトルに移民した日系1世について筆者が調べてみたところ、名前の代わりに単に「Japanese」とだけ書かれているデータもありました。このような場合、本人だと特定するためには、他の年の国勢調査や州政府記録、軍務記録、市町村の死亡診断書、墓地記録など複数の情報源を合わせて調査する方

法などを教わりました。

Reading Advisory 読書案内

米国の公立図書館では読書案内のサービスが提供されています。このため、iSchoolでは読書案内も授業として開かれています。筆者は、シアトル公共図書館の元司書で、米国でカリスマ的人気がある Nancy Pearl 氏の授業を受講しました。地元テレビ局から全国放送のラジオまで、彼女は沢山の読書案内番組を担当し、読書案内に関する著作もベストセラーになっています。そのため、彼女の授業は大変人気があり、iSchoolの中でも履修登録が

難しいことで有名です。

読書案内では小説の内容によるジャンル分けが重要で、授業ではそれぞれのジャンルに合わせた代表的な本や著者を覚えます。読者は小説を読む時にジャンルにこだわる傾向があるため、読書案内する上で利用者に今まで読んで中で一番好きだった本、最近読んだ本などを聞いて、その利用者が好むジャンルを見極めます。その上で、彼らが今まで読んでおらず、興味を持ちそうな本を案内しなければなりません。いわば司書は読書の専門家として、利用者の読書のカウンセリングをすることが求められているのです。また、図書館の利用者に読書案内をしていく上で有効な対応方法も教わります。ある特定のテーマのタイトルを集めたブックマークを作成することや、1分でその物語を利用者に紹介する方法なども教わります。この授業を通して、米国の図書館における読書案内の専門性を知り、担当する司書たちの小説に関する膨大な知識量と行動力に圧倒されました。

SNS時代の履修登録

履修登録は専用のサイトを使って行います。登録開始日の朝8時から申込受付が始まります。人気の授業は登録開始から3分以内には埋まってしまい、あまりにアクセスが集中しすぎて、サーバが落ちて対応出来なくなってしまうこともあります。Facebookに各学年1つの非公開グループがあり、その同級生グループ内でお互いの登録状況を同時に実況中継することが多く、「〇〇の授業は埋まってしまい、順番待ちになった」「△△の授業はまだ2席残っているので急げ」など、数分間で100以上のコメントのやり取りがあります。一方、人気のない授業に登録した場合は、時に恐ろしい事態が待ち受けています。iSchoolの規定により、学期開始までに8名以上の学生の登録が無い授業は開講中止となり、その授業に履修登録した学生は改めて別の授業に登録し直す必要があるためです。開講中止の決定は学期開始後であり、その時点では多くの授業が学生で埋まってしまい、別の授業を選ぶことが大変難しくなるのです。このため、人気のない授業を選んだ学生は、学期開始前に必死に同級生に登録してもらうようにアピールして、授業が中止にされる事を防ごうとします。ただ、取得単位数によって学費が決まるため、興味のない授業に登録する学生はおらず、毎学期複数の授業が中止に追い込まれます。

Government Publication 政府刊行物

政府刊行物の授業はUWの政府刊行物の主題専門司書が講師として教えています。教科書に沿った内容だけでなく、図書館大会に論文を投稿する想定でレポートの課題を出すなど、実際に司書になってから役立つ知識も授業で教わります。米国の大学図書館司書は年ごとに雇用が更新される場合とテ



4,5 ハスキー犬はUWのマスコットです。各種イベントには実物も登場します。6 UWの噴水からレーニア山が見えるように、この景観を遮る建物を建てることは州法で禁じられています。7 新しい教室は通学生と通信生が同時に講義を受けられるように、カメラとスクリーンが備わっています。8 iSchoolの博士課程の学生と教員の研究発表会。ここで各自の研究プロジェクトをアピールして企業に研究資金の援助を依頼します。

ニュアという制度で永年雇用される場合があり、例えばUWでは雇用されてから6年目にテニユアの審査を受けることができます。この審査では上司や同僚からの評価以外に、雇用中に執筆した論文、図書館大会で行った発表などの実績も合わせて評価されます。このため、雑誌に論文を投稿すること、図書館大会で発表することが大学図書館の司書としては重要なのです。

講師の紹介で筆者は米国政府印刷局の政府刊行物の管理者用研修に参加する貴重な機会も得ました。授業で教わる内容以外にも、米国政府印刷局が主体となって行う寄託図書館制度について学び、大変勉強になりました。

Data Curation データ・キュレーション

データ・キュレーションとは、長期にわたってデータを保管するデータ・アーカイブよりも広い概念で、データ管理全般の総称です。米国ではまだ目新しい分野ですが、iSchoolでは選択科目の一つとして教えられています。大学図書館の求人広告ではデータ・キュレーターが増えており、就職先が乏しい司書職の中では雇用される可能性が高い職種といえます。このため、学生の中でもデータ・キュレーションは人気があり、履修登録の際には40名程度のキャンセル待ちが出たほどでした。授業では主にICPSR (Inter-university Consortium for Political and Social Research) やDSpace@MITなど、大学の主要なデー

タ・リポジトリにおけるデータの保存、メタデータの作成、データ・リポジトリ間でのデータの連携に関して教わります。異なる分野では様々な識別子でデータが作成されるためデータの連携が難しいようです。また時間がたつと作成者さえもデータの項目を忘れてしまうこともあり、せつかく保管しているデータがあっても2次利用に結びつくことが困難なのです。データ活用を進める上での課題が多い中、どのように図書館がデータ・キュレーションを主導していくか、授業でも議論しました。

Directed Fieldwork

iSchoolでは現場で実習することによって単位を取得することができるDirected Fieldwork (DFW) という制度があります。米国の図書館に就職するためには人脈づくりが最も大切だと言われており、実習などで人脈を作ることをiSchoolでも奨励しています。さらに米国の図書館では新規採用者や若手職員を育成していく風土に乏しく、初めて司書として図書館に雇用された時でも一人前の仕事をこなすことが要求されます。このため、採用される前に図書館などの情報機関で十分に働く経験を積んでおく必要があります。DFWはその両方の機会を学生に与えています。

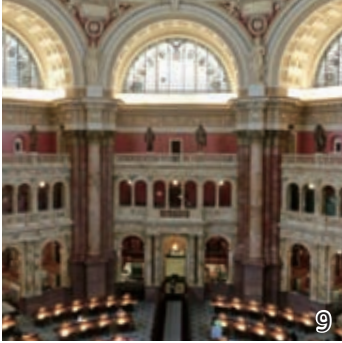
DFWの申請をするためには、必修

授業30単位と実習先で行う仕事に関連した授業で一定の成績を取っていることが前提となっています。申請に必要な条件を満たすことができるのは、早くとも1年目の夏学期になるので、多くの学生は帰省を兼ねて夏学期に地元の図書館でDFWを行います。DFWの実習先との交渉などの手続きは全て学生自身が行います。

DFWでは図書館情報学の修士号を所持する上司(監督者)の元で、達成目標を決めて実習を行うため、学生が単なる雑用を行う労働力として使われることはありません。さらにDFWを監視するiSchoolのコーディネーターもいるため、実習内容と異なる仕事を上司にさせられた場合、学生はiSchoolを通して苦情を言うことができます。実習中、学生は毎週1回iSchoolにレポートを提出することが義務付けられ、また、実習期間の中間と終了時には実習先の上司から直接iSchoolに対して実習成果の報告が行われます。これらのレポートと実習成果をiSchoolが確認した上で単位が付与されます。

LCアジア部

筆者は2014年7月から8月の約1か月間、米国議会図書館(LC)のアジア部でDFWを行いました。筆者は、国立国会図書館(NDL)同様、国立の機関であるLCにおけるレファレンス業務にも関心がありました。LCの



アジア部に DFW について問い合わせをしたところ、運良く日本課で受け入れて下さることになりました。

筆者がいた頃の LC のアジア部は部長 1 名、副部長 1 名、行政担当官 1 名、事務官 1 名、中国・モンゴル課 6 名、日本課 4 名、韓国課 2 名、南アジア課 2 名、東南アジア課 1 名の 19 名で構成されていました。他に複数のボランティアやインターンシップ生が働いています。課という名は組織上存在せず、特定の地域を主に担当する司書と資料管理等を担当する技官がまとめて便宜上、課という単位で業務を行っており、課の中では監督責任者の立場になる人はいません。課はそれぞれの国や地域の蔵書の管理とレファレンスを担当しており、資料の収集や整理は異なる部で行われています。

LC の 3 館で最も古いトーマス・ジェファーソン館の一階にあるアジア閲覧室の奥に事務室があります。閲覧室のカウンターは当番制になっており、司書か技官が一人で対応しています。アジア部の職員は早い人は 6 : 30 から、遅い人は 9 : 30 から業務を開始しているため、お互いのスケジュールはソフトウェアで共有し、業務に支障が出ないように管理しています。毎月 1 回開かれる部内会議は全員が揃う機会となっており、各業務の進捗状況が報告されます。

アジア部の司書の業務は多岐にわた

りますが、おおよそ 3 種類に分類することができます。1 番目はアジアに関する蔵書の構築です。担当地域の専門家として選書を行い、蔵書の専門性や多様性を保持します。蔵書の傷み具合を調査して、資料保存部への補修依頼も行います。

2 番目にはレファレンスを中心とした利用者サービスです。アジア閲覧室のカウンターでは来館者のレファレンスに回答します。利用者の入退室管理、資料の請求方法の案内、複写やスキャナーの使い方を教えるなど、他の閲覧室でも行っている業務以外にも、アジアから来た英語が話せない観光客に対して、通訳がわりに館内に関する質問にも回答します。また事前に申請すれば調べ物に必要な本を用意しておく研究者向けのサービスを提供しており、来館予定日の前の日までに閲覧室の専用棚に本を準備します。オンラインのレファレンス・システムである OCLC のクエスチョン・ポイントを通して届くレファレンスにも、司書は 5 営業日以内に回答します。無論、アジア部にいる司書がアジア各国すべての言語を理解することは不可能なため、司書以外の技官の手助けを受けながら、レファレンスに回答します。レファレンスは主に人文科学や社会科学に関する質問が多いようです。なお、LC ではチャットによるレファレンスも受け付けていますが、アジア部では提供していません。司書は、地域の専門家として、常に最新の学術動向を把握するた

めに、研修やオンライン講座を受講したり、他機関の専門家と個人的な繋がりを作ったりと、専門情報の共有を行っています。

3 番目は上記以外の業務です。ボランティアやインターンシップ生の監督も業務の一部です。特に毎夏実施しているジュニア・フェローズ・インターン・プログラムでは、学生に特定のプロジェクトを与えて一緒に取り組んでいきます。筆者がいた年には 48 名がプログラムに参加しており、アジア部では日本研究専攻の学生を 1 人受け入れていました。この学生は LC の目録と実際にアジア部で保管しているマイクロフィルムを照合して、LC の目録に無いものを探す作業をしていました。この中に琉球王国で 16 世紀に編纂された歌謡集『おもろさうし』のマイクロフィルムがありました。沖縄戦の後、『おもろさうし』は米兵によって米国に渡って、LC に寄贈されました。その後、現物は沖縄に返還され、国の重要文化財にも指定されて現在は沖縄県立博物館で保管されています。LC は返還前にマイクロフィルムを作成しましたが、こうした経緯のためか、目録に載ることはなく、この学生の調査によってマイクロフィルムを所蔵していることが再発見されたわけです。学生たちが発見したこのような成果を披露する発表会が毎年開かれ、一般にも公開されています。

これ以外にも司書たちは LC を訪問



9 LCの主閲覧室。利用するためには登録利用者カードが必要です。 10 アジア閲覧室。 11 閲覧室内の日本語資料。 12 ジュニア・フェローズの発表会場。 13 『おもろさうし』を調査した学生の発表。

する研究者や司書に対して、館内のツアーや業務説明も行います。トーマス・ジェファソン館には大きな展示室が複数設けられており、定期的に展示会が開かれ、関連する主題の場合は、アジア部の司書もその企画に加わります。日本課の司書も以前、“Sakura: Cherry Blossoms as Living Symbols of Friendship” という展示会の企画に参加していました。このような大規模な展示会以外にもアジア閲覧室にある小展示スペースで各課の担当者が順番に本の展示を行っています。

4つの課題

このアジア部で筆者は4つの課題を与えられ、日本課の司書の指導を受けながら、約1か月のDFWを行いました。最初の課題は筆者自身の研究テーマと関連するLCのレファレンスを把握することにしてもらい、アジア部の司書の業務内容を観察する機会を得ました。

2番目の課題は、LCのデジタル化業務を理解することでした。LCでは日本で戦時中に検閲された資料を所蔵しています。筆者がDFWを行っていた期間中、NDLの依頼によって、アジア部はこの資料群をデジタル化するプロジェクトを行っていました。撮影を担当する業者は、日本語を判読できないため、デジタル化された画像が適切なものかどうか、筆者は画像を検品しました。

3番目の課題では中国に関する文献

リストの作成を行いました。LCでは中国に関するレファレンスが多いそうで、日本語の中国に関する文献は内容が詳細なため、アジア部において本格的な収集が計画されていました。筆者はNDLの同僚にアドバイスを受けながら、近年出版されている学術書の中から中国を主題としている日本語の文献一覧を作成しました。

LCのレファレンス本に習熟することが4番目の課題として与えられました。この課題の一環として、アジア閲覧室のレファレンス本のリストを作成しました。LCは世界最大の図書館であり、蔵書数もNDLより多く、アジア閲覧室にも所蔵目録に載っていない資料があります。また、人員削減による人手不足もあり、レファレンス本の更新がままならない状態でした。こうした実態を把握すべく、筆者は千冊以上あるレファレンス本を一覧にした結果、やはり新しい版が入手できていないものがありました。一方、新しい版が開架されている資料については、NDLとの国際交換業務を通して入手しているものもあり、国立図書館同士の交流の重要性を改めて感じました。

Capstone

修士論文の代わりに行うCapstoneは、あるプロジェクトを立案して、その計画に沿って実行し、発表会で結果を報告するという制度です。このCapstoneは、全てのiSchool生が取り

組まなければならない必修科目で、今まで大学院で学んできた内容の集大成とも呼べるものです。Capstoneの授業は冬学期と春学期にまたがって行われ、発表会の報告が終わらない限りは修了することができません。他の科目とは異なり、このCapstoneには地元の大企業数社が協賛しており、発表会の最後に、優秀なプロジェクトには賞金が与えられます。

まず、Capstoneの準備段階で重要なのは、1人で行うのか、それともグループで行うかを定めることです。1グループは最大4名で、iSchoolの中であればどの学科の学生ともグループを組むことができます。

次に、プロジェクトの方向性を決めます。プロジェクトは2種類に分かれます。一つはIT型のプロジェクトで、スマートフォン用のアプリやホームページの作成などが最終目標になることが多いです。過去には、あるグループが、企業のホームページに寄せられる質問にJennという架空のアシスタントがホームページ上で自動回答するプログラムを作成し、シアトルに本社があるアラスカ航空に実際に採用されたこともありました。もう一つは研究調査型のプロジェクトです。あるテーマに沿って、文献調査などを行い、学術的な観点をもって調査を進めていき、レポートを作成することが最終目標になります。

最後にプロジェクトのスポンサーを



14 Capstoneの発表会。 15 UWの卒業式。キャンパス内のアメリカン・フットボールのスタジアムで行われました。炎天下の中、4時間もガウンを着ていて大変です。

探します。スポンサーは企業でも個人でも構いません。自分のアイデアを企業に売り込んでスポンサーになってもらうこともあれば、スポンサーから募集がかかることもあります。あるグループは米国のデジタル化資料のリポジトリである HathiTrust に持ち掛け、実際に HathiTrust のメタデータに関わるプロジェクトを行いました。一方、地滑りで多大なる被害にあったワシントン州の町から、町の風景を思い出として残すためにデジタルアーカイブを作成するプロジェクトを行うグループの募集もありました。この Capstone の準備時期にはスポンサーの情報が iSchool のイントラネットの掲示板に掲載され、学生たちは情報を集めながら慎重にスポンサーを決めていきます。

これらの準備が全て終わると、実際のプロジェクトの計画を立てはじめます。この計画はプロジェクト管理ソフトウェアを用いて、毎週のプロジェクトの進め方を決めて、その計画通りに行うこととなります。Capstone では講師以外に4人のアシスタントが学生のプロジェクトをサポートします。定期的にアシスタントによる面談やレポートの提出が義務付けられ、各グループが計画を着実に実行しているか、講師が各グループを指導します。ただ、管理ソフトや講師のサポートがあっても着実にプロジェクトが実行できるとは限りません。あるグループは

スポンサーであった人物が勤め先を解雇されてしまい、冬学期の途中で計画が頓挫してしまいました。学期の途中で UW をやめて就職する学生もいて、4人グループで計画した内容を3人で実行することになったグループもありました。プロジェクトを終わらせないと修了できないため、準備段階でのスポンサー選びやグループ選びには慎重になります。

なお、筆者は研究調査型のプロジェクトを行い米国の大学図書館に勤務する主題専門司書の情報行動を調査しました。この調査によって、米国の大学に勤務する主題専門司書が、どのように学術情報を取得し、お互いに共有していくかが分かりました。Capstone の課題ならばと、多くの司書が調査に協力して下さい、筆者も Capstone の恩恵によって調査がはかどりました。

Capstone では周囲の人と同じ目標に向かって働く経験を積んでいきます。この経験は、将来の勤務先でプロジェクトの一員として働くときにも生きてくることでしょう。同時にプロジェクトを通してスポンサーと人脈を形成することができるため、スポンサーになってもらった企業にそのまま就職する場合や、スポンサーの紹介で関係する仕事に就くケースも多いのです。学生が主体的に学んで成長できるこのプログラムは、一般的なインターンシップよりも学生を採用する立場の

ニーズとも合っているのではないかと思います。

おわりに

本在外研究では、実務に役立つ知識を得るのみならず、日本とは異なる米国の情報学大学院における先進的な司書教育を実際に経験することができました。iSchool のカリキュラムは、日本の図書館界が情報専門家を育成する上で示唆に富むものでした。情報専門家を巻き込む多くの条件が変化しており、図書館側も望む人材を戦略的に確保していく必要があります。これからは図書館も大学に対して教育内容の改善の努力を促し、共に情報専門家を育てていくことが求められます。最後に、このような貴重な機会を与えてくださった皆様に感謝申し上げます。

(ひがしがわ あづさ)

国際子ども図書館資料情報課)

- 1 https://iss.washington.edu/sites/default/files/u65/Students%20Profile%202014_0.pdf
- 2 <http://www.ala.org/offices/sites/ala.org/offices/files/content/diversity/diversitycounts/diversitycountstables2012.pdf>
- 3 <https://ischool.uw.edu/sites/default/files/documents/Class%20Profile%20MLIS%202014.pdf>
- 4 <https://ischool.uw.edu/sites/default/files/documents/mlis/MLIS%20career%20infographic.pdf>

国立国会図書館の平成28年度予算

国の平成28年度予算が平成28年3月29日に成立しました。国立国会図書館の平成28年度歳出予算額は、195億5,632万円です。前年度の当初予算額と比較すると、退職予定者の減に伴う職員人件費の減額等により、約4億7,900万円の減額となりました*。

平成28年度予算のおもな内容は次のとおりです。

1 デジタル・アーカイブ事業の推進

国立国会図書館では、我が国の知識・文化の基盤となる出版物への安定的で永続的なアクセスを可能とするため、デジタル・アーカイブ事業を推進しています。平成28年度におきましても、資料の利用と保存の両立の観点から、国内刊行資料の計画的なデジタル化等を実施します。そのために必要な経費として、平成28年度は約1億1,300万円が計上されました。

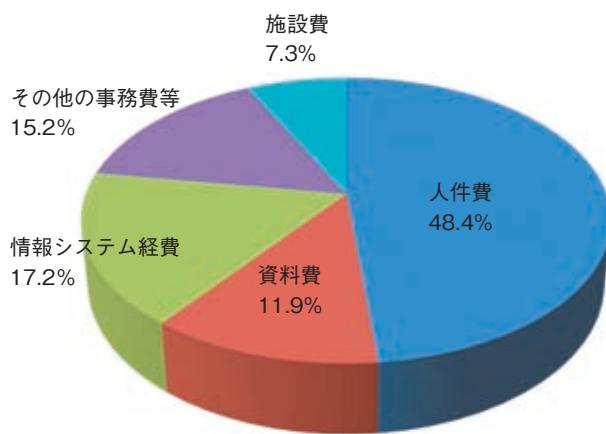
本勧告に基づき、平成28年度から関西館において新たな書庫棟の建設工事に着手します（平成31年度末竣工予定）。そのために必要な経費として、平成28年度からの4か年の国庫債務負担行為総額約143億2,600万円及び初年度分の工事費約1億6,000万円が計上されました。

（総務部会計課）

* 東日本大震災復興特別会計への予算計上は、平成27年度をもって終了しました。

2 関西館第2期第1段階施設整備

平成26年11月、国立国会図書館建築委員会から、現有書庫の収蔵能力に鑑みて、関西館第2期第1段階施設を平成31年度までに整備することが妥当である旨の勧告がなされました。



予算の費目別構成比 (平成28年度)

平成28年度歳出予算額 (単位：千円)

(項) 国立国会図書館	18,130,198
人件費	9,459,677
国立国会図書館共通経費	162,493
国会サービス経費	261,156
資料費	2,333,978
うち納入出版物代償金	390,249
情報システム経費	3,357,970
東京本館業務経費	1,463,789
国際子ども図書館業務経費	259,937
関西館業務経費	831,198
(項) 国立国会図書館施設費	1,426,122
関西館第2期第1段階施設整備費	159,974
東京本館庁舎整備費	930,700
関西館庁舎整備費	245,567
国際子ども図書館庁舎整備費	89,881
計	19,556,320

箔押しのお仕事

童話『銀河鉄道の夜』に登場する少年ジョバンニは、学校が終わると「活版処」に通ってアルバイトをしていました。彼の仕事は小さなピンセットで粟粒ぐらいの活字を拾うこと。この「^{ぶんせん}文選」と呼ばれる作業は活版印刷の初めの工程です。活版印刷とは活字を組み合わせで作った版を用いて印刷する技術で、版の一段高くなった部分にインクをつけ紙に押し付け印刷します。木版やハンコとも同じ仕組みです。

実は、館内の資料の保存・修復を担当する資料保存課洋装本保存係では、本の修復作業の一工程として、今でもこの伝統的な活版技術を利用して本の背表紙に文字を入れることが稀にあります。箔を圧着させて文字を入れるため、この作業は「箔押し」と呼ばれています。すでに箔押しされた本の表紙を取り換えることになったとき、巻号や年数の表記に変更が生じたときなどに登場する作業です。

箔押しはまず、必要な活字を一文字ずつ手作業で集めてくることから始まります。大人の背丈ほどある棚にぎっしり並んだ小さな活字の山から目当ての文字を探し出す作業は、宝探しのようなワクワク感があると同時に、不慣れな身にはクタクタに疲れる仕事でもあります。漢字は部首別に分類された上で画数順に配置されているため、あらかじめ部首を調べておくとスムーズです。ところが、何十年も前から使用されているこの活字、「県」が旧字体「縣」の部首



に従って「糸」の仲間に分類されていたり、意外と簡単な文字が見つからずに往生することもしばしば。

次に、必要な文字が集まったら箔押し機に活字を並べてセットし、熱を加えて箔を本の背表紙に圧着させます。長いタイトルは分けてセットしたり、活字の間に小さく切った薄い紙を挟んで摩擦を生じさせ、活字のズレを抑えたりと、先輩たちから伝わる細かな工夫を凝らします。もちろん、国立国会図書館の梅の花のマークを押すのも忘れてはいけません。

箔押しは製本や修復のほんの些細な一工程ですが、本の背表紙という真っ先に目に入る部分の肝心要の作業でもあり、そのぶん神経を集中させて取り組んでいます。箔押しされた本に出会った際には、かつて誰かがこんな風に文字を入れたのかもしれないと思うと、普段とは違った味わいを感じていた

だけのかもしれません。
(収集書誌部資料保存課
いばらきっ子)



本屋にない本

国立国会図書館は、法律によって定められた納本制度により、日本国内の出版物を広く収集しています。このコーナーでは、主として取次店を通さない国内出版物を取り上げて、ご紹介します。

博報堂120年史 = Hakuodo 120

博報堂 編・刊
2015.10 518p 27cm <請求記号 DH22-L703>

博報堂は、日清戦争が終結した1895(明治28)年、教育雑誌の広告取次店として創業した。本書は、博報堂創立120周年を記念して刊行された、博報堂初の通史である。

第1部は、創業者瀬木博尚の誕生から、43歳で博報堂を創業し、1955(昭和30)年に創業60周年を迎える頃までを追う。自由民権運動による投獄中に瀬木が知り合った宮武外骨との親交や教育関係者との出会い、教育雑誌から新聞への拡大、通信事業への進出、博文館とのつながりや円本ブームでの成功など、その歴史はまさに出版史とリンクしている。

第2部から第4部は、以降の60年についてである。民間ラジオ放送・テレビ放送の開始、高度経済成長の開始と終焉、バブル景気と崩壊、インターネット利用の急拡大など、広告を取り巻く社会状況が変化中、博報堂が、広告の近代化や、「生活者」発想(広告の受け手を単なる消費者とみるのではなく、さまざまな心の満足を求める生活者としてとらえる発想)への転換などの取り組みを進めていく様子が書かれている。

巻末の年表では、博報堂の変遷とともに、広告・メディア業界、社会一般の動きも一覧することができる。広告史やメディア史に関する参考文献もまとまっている。

また、本書の各所には、「映画「風の谷のナウシカ」誕生秘話」など、さまざまな出来事の裏話や補足情

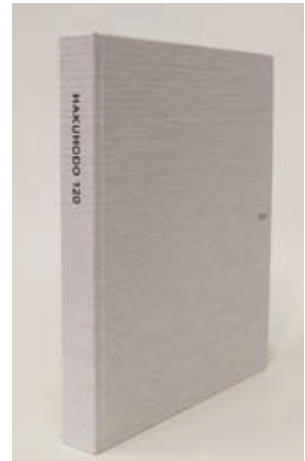
報が、コラムとして掲載されている。どれもおもしろいが、個人的に最もひきつけられたのは、「生きる伝説」というコラムである。クリエイティブディレクターとして活躍し、社内で「生きる伝説」と呼ばれた小沢正光の「伝

説」に立ち会ったスタッフたちが、社内資料として彼の名言等をまとめていて、それがついに一昨年版されるに至ってしまいました、という小さなコラムなのだが、そうした「伝説」を大切にしていることが社風を象徴しているようで印象に残った。

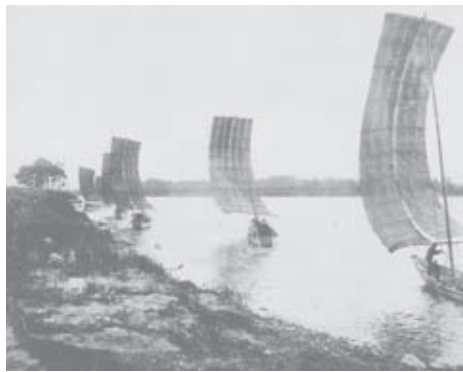
ちなみに、分厚く大きい本書とセットで、ペーパーバック版(請求記号DH22-L702)も刊行されている。21cmとコンパクトなサイズである。鈴木聡、逢坂剛、酒井順子といった博報堂OB・OG、関係者6名による寄稿と、120年の歴史ダイジェストおよび年表から構成される。博報堂時代の思い出や、創業前の瀬木博尚を想像した脚本仕立てのエッセイなどが、軽妙な筆致で綴られており、読んでいてとても楽しい。表紙には「博」と「報」の文字が大きく掲載され、書き順ごとに10から120の数字を振って、120年の歴史を表している。

社史をかたい本とやわらかい本の2冊構成としたところや、ちらりとどく遊び心に、博報堂の社風や社史編纂者の想いを感じた。

(収集書誌部外国資料課 吉井 伶奈)



博



電子展示会

「写真の中の明治・大正」に 東北の写真を追加しました！

国立国会図書館では、平成28年4月現在、ホームページ上に24の電子展示会を開設しています。その中の1つ、「写真の中の明治・大正」では、当館が所蔵する明治・大正期の写真帳から選んだ著名な建築物や観光名所などの写真を紹介しています。

すでに公開している東京編、関西編に続き、平成28年4月27日（水）に東北の写真を追加公開し、また、サイトを統合しました。これにより掲載されている写真は約1,300点となり、横断検索もできるようになりました。



http://www.ndl.go.jp/scenery_top/

国立国会図書館の資料利用制限措置について

4月1日に国立国会図書館資料利用制限措置に関する規則（平成28年国立国会図書館規則第2号）が施行されました。これは、これまで定めていた資料利用制限措置の取扱いに関する事項を整理し、資料利用制限措置の要件を明確にするとともに、学識経験者による事後審査の仕組みを設けてより適切な措置の決定ができるようにするものです。

概要

資料利用制限措置とは、人格的利益の侵害、著作権等侵害、わいせつ物、児童ポルノ等の理由により、資料の閲覧、複写等の利用を制限する措置です。資料全体に対して利用の全部を制限する場合（利用禁止）と、資料の一部又は利用の一部に限り制限し、または、許可を得ることを条件とする場合（条件付利用）があります。

基本方針

資料利用制限措置をとるに当たっては、国立国会図書館が収集した資料は、国民の文化財として蓄積し、その現状を保存して将来にわたって広く国民に公開し、その利用に供すべきものであることに留意しなければならないことを明記しています。

また、資料利用制限措置をとるに当たっては、廃棄や返還など資料の現状に変更を加える措置は行わないこととしています。

要件

資料利用制限措置をとる要件は、次の6つです。

- ① 名誉毀損、プライバシー侵害など人格的利益の侵害が明らかである資料
- ② 著作権等を侵害して発行されたことが明らかである資料
- ③ わいせつ物であることが裁判で確定した資料
- ④ 児童ポルノに該当することが明らかである資料
- ⑤ 公的機関が発行した内部資料又は利用範囲が限定されている資料であって、情報公開法等で不開示情報とされている情報を含むもの
- ⑥ 民間で発行された内部資料又は利用範囲が限定されている資料であって、内容の公開により権利利益を害することが明らかであるもの

なお、このうち①から④までについては、それぞれの要件の有無について裁判所に係属中のものを含みます。この場合、裁判の結果、各要件に該当しないことが裁判により確定した場合または判決が確定せずに裁判が終了したときは、資料利用制限措置は終了します。

措置の決定

要件のうち①、②、⑤、⑥に該当する資料については、著作者、発行者又は利害関係者からの申出により手続を開始します。ただし、確定判決により①、②に該当するとされた資料、または訴訟が裁判所に係属している資料については、申出のほか情報提供や報道などを受けて手続を開始することもあります。③、④に該当す

る資料については、申出ではなく、情報提供や報道などを受けて手続を開始します。

手続が開始されると、資料利用制限措置に該当するかどうかについて審査を行います。審査は、申出書面等をもとに、主に収集書誌部において行います。審査の結果は国立国会図書館長に報告されます。前例がないような事案など慎重な検討を行う必要がある場合には、館長が部長局長に意見を聴取することができます。これらの審査の結果に基づき、資料利用制限措置を決定します。申出に基づいて手続を開始した場合には、申出者に決定の内容を通知します。

再審査

資料利用制限措置がとられている資料の著作者、発行者又は利害関係者は、その措置の解除又は変更を申し出ることができます。この申出があったときは、再審査を行い、その措置の解除、変更又は継続を決定します。

また、資料利用制限措置の決定から5年ごとに、又は決定の理由となった事情に変更があったときに、再審査を行い、その措置の解除、変更又は継続を決定します。

再審査の手続は措置の決定の際の審査に準じて行われます。決定の内容は、再審査の申出者に通知されます。また、解除又は変更の決定があったときは、元の資料利用制限措置に関する申出者にも通知されます。

説明書の交付

資料利用制限措置のために資料の利用が制限された利用者は、資料の利用を制限された日の翌日から30日以内に、資料利用制限措置に関する説明書の交付を求めることができます。

苦情の申出

資料利用制限措置および再審査の申出者で決定の通知を受けた者（申出と同じ内容の資料利用制限措置をとる旨の通知を受けた者を除く。）と資料利用制限措置に関する説明書の交付を受けた利用者は、通知や説明書の交付があった日の翌日から60日以内に、館長に対し苦情を申し出ることができます。

苦情があったときは、学識経験者3名で構成する資料利用制限審査会に諮問します。この審査会の答申があったときは、館長は、この答申を尊重して、苦情の対象となった資料利用制限措置の解除、変更又は継続を決定します。

国立国会図書館は、国の唯一の納本図書館として、所蔵資料を広く利用に供するという任務を適正に果たすために、資料利用制限措置制度を慎重かつ適切に運用するよう努めていきます。

(収集書誌部収集・書誌調整課)



**平成27年度納本制度審議会
オンライン資料の補償に関する小委員会
(第1回)
および
第27回納本制度審議会**



3月23日、平成27年度納本制度審議会オンライン資料の補償に関する小委員会（第1回）および第27回納本制度審議会が、審議会委員9名、専門委員3名が出席して東京本館で開催された。

小委員会では、平成27年12月1日から開始された電子書籍・電子雑誌収集実証実験事業について、事務局から報告を行い、質疑応答があった。

小委員会終了後開催された審議会では、まず、第11回代償金部会の調査審議の経過および議決並びに第12回代償金部会の調査審議の経過について、齋藤誠部会長が報告を行い、質疑応答があった。また、事務局から、電子書籍・電子雑誌収集実証実験事業について報告を行った。この件について、小委員会における議論が福井健策小委員長から紹介され、質疑応答があった。

審議会に関する情報は、[国立国会図書館ホームページ>国立国会図書館について>納本制度審議会 \(http://www.ndl.go.jp/jp/aboutus/deposit/council/index.html\)](http://www.ndl.go.jp/jp/aboutus/deposit/council/index.html)に掲載している。

納本制度審議会委員・専門委員名簿(五十音順 敬称略)(平成28年3月23日現在)

会 長	中山 信弘	明治大学特任教授、東京大学名誉教授
会長代理	福井 健策	弁護士
委 員	石崎 孟	一般社団法人日本雑誌協会理事
	植村 八潮	専修大学文学部教授
	江上 節子	武蔵大学社会学部教授
	遠藤 薫	学習院大学法学部教授
	相賀 昌宏	一般社団法人日本書籍出版協会理事
	角川 歴彦	株式会社KADOKAWA取締役会長
	齋藤 誠	東京大学大学院法学政治学研究科教授
	斉藤 正明	一般社団法人日本レコード協会会長
	白石 興二郎	一般社団法人日本新聞協会会長
	永江 朗	公益社団法人日本文藝家協会電子書籍出版検討委員会委員長
	根本 彰	慶應義塾大学文学部教授
	野原 佐和子	慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科特任教授
	藤井 武彦	一般社団法人日本出版取次協会会長
専門委員	佐々木 隆一	一般社団法人電子出版制作・流通協議会監事
	三瓶 徹	一般社団法人日本電子出版協会事務局長
	樋口 清一	一般社団法人日本書籍出版協会事務局長

○オンライン資料の補償に関する小委員会所属委員・専門委員

福井健策（小委員長）、植村八潮、遠藤薫、齋藤誠、永江朗、根本彰、佐々木隆一、三瓶徹、樋口清一



お知らせ

■ 近代デジタルライブラリーを終了し、国立国会図書館デジタルコレクションに統合しました

近代デジタルライブラリーは、平成28年5月31日をもってサービスを終了し、国立国会図書館デジタルコレクションに統合しました。また、国立国会図書館デジタルコレクションについてトップ画面の構成を見直すなど一部リニューアルしました。

近代デジタルライブラリーでは、明治以降に刊行された図書・雑誌のうち、インターネットで閲覧可能なデジタル化資料を公開してきましたが、これらの資料は、国立国会図書館デジタルコレクションで引き続きインターネットからご利用いただけます。今後も、戦前期刊行図書から順次著作権の処理を進め、インターネットから本文画像をご覧いただける資料を増やしていく予定です。

なお、近代デジタルライブラリー収録資料のURLは当面の措置として、国立国会図書館デジタルコレクションにリダイレクト（転送）します。引き続き同じURLでご利用いただくことも可能ですが、ウェブサイト等から近代デジタルライブラリーにリンクしている場合は、以下のとおり国立国会図書館デジタルコレクションのURLに変更していただくようお願い申し上げます。

平成14年のサービス開始以来、長年にわたりご愛顧いただき、誠にありがとうございました。

変更前 <http://kindai.ndl.go.jp/>

変更後 <http://dl.ndl.go.jp/>

※URL中の「kindai」を「dl」に変更してください。

※サブディレクトリ部分（info:ndljp/pid/数字 等）の変更はありません。

○国立国会図書館ホームページ (<http://www.ndl.go.jp/>)

>国立国会図書館デジタルコレクション

URL <http://dl.ndl.go.jp/>

○問合せ先

国立国会図書館 関西館 電子図書館課 電子化資料提供係

電子メール dl@ndl.go.jp

電話 0774 (98) 1472 (直通)

お知らせ

■ 新刊案内 国立国会図書館の 編集・刊行物



レファレンス 783号 A4 138頁 月刊 1,000円(税別) 発売 日本図書館協会
<小特集：新安保法制の今後の課題>

ユニット・セルフディフェンスから見た新安保法制の論点—米軍等武器等防護
の意義と限界—

他国軍隊の敵対行為への支援の国際法上の評価

戦後日本の安全保障法制の展開と世論

フランスにおける憲法解釈機関としてのコンセイユ・デタ行政部

フランスにおける憲法改正過程

入手のお問い合わせ

日本図書館協会

〒104-0033 東京都中央区新川1-11-14 電話 03(3523)0812

CONTENTS

- 02 Greetings from new NDL Librarian Sawako Hanyu
- 04 <Book of the month - from NDL Collections>
From superstition to science *tenpen chii* : a general introduction to science
published in the first year of the Meiji era (1868)
- 06 International Symposium on the Great East Japan Earthquake Archive
FY2015 “Disaster Archives as community memories for the future”
- 12 Music manuscripts and documents related to modern Japanese composers
newly available—a lecture and concert focusing on Japanese composer Hikaru
Hayashi
- 15 Evolving into Information Specialists:
MLIS Curriculum at the Information School, University of Washington
- 23 NDL budget for FY2016
- 24 <Tidbits of information on NDL>
Foil-stamping on the spine of library materials
- 25 <Books not commercially available>
○*Hakuhōdō 120*
- 26 TOPIC
○Photos of the Tohoku region newly added to
the digital exhibition “The Meiji and Taisho
Eras in Photographs”
○Restrictions on use of the NDL collections
- 30 <NDL NEWS>
○1st subcommittee on Compensation for
Acquired Online Publications of the Legal
Deposit System Council FY2015 and 27th
meeting of the Legal Deposit System Council
- 31 <Announcements>
○Digital Library from the Meiji Era integrated
into the NDL Digital Collections
○Book notice - Publications from NDL

国立国会図書館月報

平成28年6月号 (No.662)

平成28年6月1日発行

発行所 国立国会図書館

編集者 秋山勉
責任者

印刷所 株式会社丸井工文社

〒100-8924 東京都千代田区永田町1-10-1
電話 03 (3581) 2331 (代表)
FAX 03 (3597) 5617
E-mail geppo@ndl.go.jp

本誌に掲載した論文等のうち意見にわたる部分は、それぞれ筆者の個人的見解であることをお断りいたします。
本誌に掲載された記事を全文または長文にわたり抜粋して転載される場合には、事前に当館総務部総務課にご連絡ください。
本誌517号以降、PDF版を当館ホームページ (<http://www.ndl.go.jp/>) > 刊行物 > 国立国会図書館月報でご覧いただけます。



「古代希臘^{ギリシャ}より現代日本へ」 杉浦非水 画
『三越』第15巻 第6号
大正14（1925）年6月 三越 26cm
<請求記号 雑23-23イ>

国立国会図書館月報

平成28年6月1日発行（毎月1回1日発行）
（6月号通巻662号）